幼児の遊び・子供の勉強位置とオープン域・隔離域

—ライフステージによる住み方変化の研究 3—

THE RELATION BETWEEN OPEN ZONE, CLOSED ZONE AND PLAY SPACE, STUDY SPACE IN DWELLING UNITS

—The shifts of Room-Allotting in Relation to Life Stages 3—

笠嶋 泰*, 今井正次**, 松本壮一郎***

Yasushi KASAJIMA, Shoji IMAI and Soichiro MATSUMOTO

This paper aims to explain the influences of Open zone and Closed zone on children's play space and study space. The questionnaire on 764 samples in 17 planning types, 3 LDK and 4 LDK, shows results as follows.

The children play spaces are in the Open zone when their bedrooms are in Closed zone or in their parent bedrooms. The children study spaces are in their bedrooms at elder life stages, but at younger life stages they are mostly in living room or space un-used as bedroom in Open zone.

Keywords : dwelling units, life stage, open zone, closed zone, play space, study space

住戸, ライフステージ, オープン域, 隔離域, 遊び位置, 勉強位置

はじめに

本研究は、近年の住戸規模拡大傾向に伴う部屋数の増加傾向^(注1)、諸室の分断化・閉鎖化傾向^(注2)、定住に対する居住者意識の変化等、住宅の内外にわたって起こりつつある変化を踏まえ、単純家族のライフステージごとの多様な住要求に対応できる住戸計画の指針を得ようとするものである。

本報は、この「ライフステージによる住み方変化の研究」において、集合住宅の各種住戸平面と就寝分離・就寝分解の時期^(注3)との関係を扱った第1報^(注4)、集合住宅の各種住戸内でのライフステージに伴う寝室位置変化から推察される新しいゾーン概念を提案した第2報^(注5)に続くものである。

1. 目的と方法

1.1 目的

第2報では、子供が就寝分離・就寝分解していく過程で、就寝室の数^(注6)が単に不足することなく用意されていけば良いのではなく、確保できる親と子供の寝室位置関係が重要であることを示した。すなわち、親と子供の寝室位置関係は、就寝分離した住み方事例では、ライフ

ステージの初期段階から中間段階にかけては親、子供ともオープン域（以下O域と略記）^(注7)とされ、中間段階から最成長段階^(注8)にかけては親はO域、子供は隔離域（以下K域と略記）^(注7)とされる。また、就寝分解後の子供の寝室位置はおおむねK域とされるが、K域内の就寝室の数、子供の性別等によりO・K域を使い分けることで要求に対応していることを報告し、O・K域概念を把握することが住戸平面計画に多くの示唆を与えることを示した。

本報は、第2報で提案したO・K域が幼児の遊び位置と子供の勉強位置にどのような影響を及ぼすかをライフステージと絡めながらとらえ、O・K域が寝室位置ばかりでなく、幼児や子供の生活にとっても意味があることを示すことを目的とする。

1.2 既往研究との関係

幼児の遊び位置や子供の勉強位置について考察した研究は、本学会の大会論文に多く散見できるが、同論文報告集ではあまりみられない。わずかに、公私室型住宅^(注9)を考察対象としながら、私的部分の面積とリビングルームへの私的家具ないし私的生活の流入との関係を扱った論文^(注10)と、2DK・3K・3DKを考察対象とし、平面型

* 大同工業大学 助教授・工修

** 三重大学 教授・工博

*** 愛知工業大学 助教授・工学士

Assoc. Prof., Daido Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Mie University, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Aichi Institute of Technology

3LDK南面2室型	3矢A	3矢C	3共A	3サA	3サC	3新A
	20㎡	20㎡	24㎡	19㎡	25㎡	21㎡
	70	127	160	69	68	133
	34	47	66	40	23	46
3LDK南面3室型	3鋼A	3岩P	3岩Q	3桃A	3白A	3白B
	21・28㎡	21㎡	24㎡	21㎡	17㎡	17㎡
	86	164	190	197	45	49
	39	44	32	48	21	17
4LDK南面3室型	4池A	4伝A	4共B	4堀A	4大A	凡例 住戸名略称 A: L室 B: D室 C~F: 就寝室 : 水廻り : オープン域 : 隔離域 AB室面積 住み方事例数 遊び考察対象事例数 勉強考察対象事例数
	25㎡	27㎡	24㎡	30㎡	26㎡	
	66	130	149	50	36	
	12	28	50	15	9	
4LDK南面3室型	41	86	97	32	17	

図-1 対象住戸平面

と子供の勉強場所との関係を扱った論文⁽¹¹⁾が挙げられる。

しかし、ライフステージと絡めながら幼児の遊び位置および子供の勉強位置の変化とO・K域との関係を考察した論文は見いだせない。

1.3 研究方法

本研究は、第1・2報と同様、住み方の実態を各住戸別にライフステージ別に分析し、住み方変化の法則性をとらえ、住戸平面類型別に比較し、その法則性に対する平面型の影響を把握する方法で行う。この住み方変化を明瞭にみるため、本報も第1・2報と同様に、家族型Ck4⁽¹²⁾を設定して進めるものとする。

本報での考察対象住み方事例⁽¹³⁾は、1924の全住み方事例から家族型Cc, B, S, Co, Co⁺および母親と子供は同室で父親だけが別室で就寝する主人別室就寝型の住み方事例と家族構成員のだれかがA室（いわゆる

nLDK型平面のL室）で就寝する住み方事例を除いたものとする。また、幼児の遊び位置や子供の勉強位置についてのアンケート未記入事例の少ないライフステージを対象とするために、幼児の遊び位置についてはCb~Ck1の571住み方事例を、子供の勉強位置についてはCi~Cmfの1175住み方事例を考察対象とし、図には記載しないが、集計の母数には未記入の住み方事例も含めることとする。なお、子供の勉強位置については長子の勉強位置で考察する。

調査方法、調査年月、調査対象住戸、アンケート回収数、居住者属性等は第1報に記したので、本報では省略する。

2. 平面型と遊び位置・勉強位置

幼児の遊び位置（以下遊び位置と略記）や長子の勉強位置（以下勉強位置と略記）は、各平面型がもつ平面的

特徴に影響を受けることが予想される。本報は、遊びの位置や勉強の位置がどのようにライフステージとともに変化するかをO・K域と絡めてとらえようとするものであるが、このことを検討する前に、平面型による影響を取り除いた状況で考察する必要がある。

2.1 平面型と遊び位置

調査対象住戸の平面型の中にはA室が直接外気に接していない平面型があったり、AB室の合計面積も、図-1に示したごとく、17~28m²と相当の幅をもつ。また、O域内の就寝室の数も0~3室と幅がある。

AB室が極めて小さいことやA室が直接外気に接しないこと、さらにO域内の就寝室の数等は、子供の就寝分離・就寝分解時期と関係することを第1報で報告した。本報も、この平面的特徴に着目し、これらの平面的特徴が遊び位置や勉強位置に関係するかなかをみることにする。

表-1は、遊びがCb~Ck1を通して、どこで行われているかを平面類型別にみたものである。表中のAB室とは、いわゆるnLDK型平面のLDKに相当する部屋であり、本報ではA室、B室のどちらか一方および両方で遊びや勉強が行われている場合、これをAB室とした。余室^(注4)とは、余室で行っている場合を指し、自寝室とは家族内の他の人物と同室で就寝している・いないにかかわらず、長子が就寝している部屋で遊びや勉強を行っている場合を指す。また、他寝室とは、長子が両親や第2子等本人以外の寝室で遊びや勉強を行っている場合を指す。

この表の合計値をみると、遊びの位置は余室・AB室、自寝室で、勉強の位置は自寝室、余室、AB室でそれぞれ大半を占めている。すなわち、ライフステージによって異なることも予想されるが、遊び、勉強とも寝室ばかりでなく、AB室や余室が活用されている。

表-1に表された各平面類型の値が全体平均より著しく差があり、かつ相対する平面類型どうして両者に著しい差があるものを挙げると、「狭小AB室型平面^(注15)」のAB室使用、余室使用「行燈AB室型平面^(注15)」の自寝室使用「O域0・1就寝室型平面^(注15)」のAB室使用、自寝室使用である。

しかし、上記の結果はライフステージによる影響を考慮していない。

図-2は、遊び位置と上記の平面的特徴との関係をライフステージを絡めてみたものである。表-1より挙げた「規模一般AB室型平面^(注15)」と比べ、狭小AB室型平面ではAB室使用が少ないこと「狭小AB室型平面で余室使用が多いこと」、「直外接AB室型平面^(注15)」と比べ、行燈AB室型平面で自寝室使用が少ないこと、「O域0・1就寝室型平面でAB室使用が多いこと」「O域0・1就寝室型平面で自寝室使用が少ないこと」等のすべて

表-1 平面属性による遊び位置の比較

	AB室の合計面積				AB室の採光条件				○域内就寝室数				合 計
	狭小 AB室型平面	規模一般 AB室型平面	行燈 AB室型平面	直外接 AB室型平面	○域0・1 就寝室型	○域2・3 就寝室型							
A B室	9 11.5	162 32.8	32 33.7	139 29.2	52 43.0	119 26.4			171 29.9				
余 室	43 55.1	159 32.3	38 40.0	164 34.5	53 43.8	149 33.1			202 35.4				
自寝室	13 16.7	118 23.5	15 15.8	114 23.9	17 14.0	112 24.9			129 22.8				
他寝室	4 5.1	12 2.4	3 3.2	13 2.7	1 0.8	15 3.3			16 2.8				
未記入	14 17.9	98 19.9	14 14.7	98 20.6	7 5.8	105 23.3			112 19.6				
事例数	78	493	95	478	121	450			571				

対象住戸：全平面型
対象住戸方針：Cb~Ci、M別室・AB室を除く
狭小AB室型平面：AB室の合計面積が20㎡未満のもの(3サA・3白A・3白B)
行燈AB室型平面：A室が直接外気に接しない平面であるもの(3サA・3新A・4大B)
O域0・1就寝室：O域内にある就寝室の数が1室以下であるもの(3サA・3サC・4大A)

図-2.1 規模一般AB室型平面の場合

図-2.2 狭小AB室型平面の場合

図-2.3 直外接AB室型平面の場合

図-2.4 行燈AB室型平面の場合

図-2.5 O域0・1就寝室型平面の場合

図-2.6 O域2・3就寝室型平面の場合

凡例

- AB室：遊びがA、B室のいずれかあるいは両方で行われている場合
- 余 室：遊びが余室で行われている場合
- 自寝室：遊びが長子の寝室で行われている場合
- 他寝室：遊びが両親や第2子等本人以外の寝室で行われている場合

図-2 遊び位置の変化

は、図-2のごとく、ライフステージの各段階においても言える。以上のことは、これらの平面的特徴が、遊び位置に対してライフステージを通して影響していることをうかがわせる。

2.2 平面型と勉強位置

表一2は、遊び位置と同様に、勉強位置と上記した平面的特徴との関係をみたものである。これを、遊び位置と同様の方法で突出しているものを挙げると、「狭小AB室型平面の自寝室使用」「O域0・1就寝室型平面のAB室使用」の2つである。この「狭小AB室型平面で自寝室使用が少ないこと」や「O域0・1就寝室型平面でAB室使用が多いこと」は、Ci~Cmfのライフステージのほとんどの段階でみられる（図略）。

以上のことは、AB室の規模とO域内の就寝室の数が、勉強位置に対してライフステージを通して影響していることをうかがわせる。

3. 遊び位置とO・K域

上記までの検討により、遊び位置は平面型のもつ特徴の内、AB室の規模や外気に直接接するか否かおよびO域内にある就寝室の数等と関係することが、また勉強位置はAB室の規模とO域内の就寝室の数等と関係することがうかがわれた。しかし、上記の考察対象住み方事例の中には、余室のない住み方事例も含まれている。

以下では、O・K域が遊び位置や勉強位置にどのように関係するのかを、より住要求が現れやすい形でみるために、余室のある住み方事例を対象とし、かつ狭小AB室型平面と行燈AB室型平面を除いて考察することとする。

3.1 遊び位置とO域内の就寝室数

図一3は、上記した平面型を対象に、O域内の就寝室の数で平面を類型化し、各類型別に遊び位置とライフステージとの関係を示したものである。

各平面類型ごとに遊び位置をみると、

<O域3・2就寝室型平面>では（図一3.1）、

- ① 自寝室使用は3平面類型の中で相対的に高い値を示し、穏やかではあるがライフステージとともに増加の傾向を示す。
- ② AB室使用は3平面類型の中で相対的に低い値を示し、ライフステージとともに減少する。
- ③ 余室使用も3平面類型の中で相対的に低い値を示す。

<O域1就寝室型平面>では（図一3.2）、

- ① 自寝室使用は横ばい傾向であるが、3平面類型の中で相対的に中間の値を示す。
- ② AB室使用はライフステージとともに減少する。
- ③ 余室使用はライフステージとともに増加の傾向を示す。

<O域0就寝室型平面>では（図一3.3）、

- ① 自寝室使用はCb, Ciで皆無であり、Ck1でみられるだけである。
- ② AB室使用は3平面類型の中で相対的に高い値を示

表一2 平面属性による勉強位置の比較

	AB室の合計面積		AB室の採光条件		O域内就寝室数		合 計
	狭小AB室型平面	規模一般AB室型平面	行燈AB室型平面	窗外採光AB室型平面	O域0・1就寝室型	O域2・3就寝室型	
AB室	7	77	8	75	26	58	84
余 室	18	24.3	184	30	33	189	202
自寝室	28	37.8	703	81	86	845	731
他寝室	2	2.7	28	5	5	25	30
未記入	21	28.4	157	34	17	181	178
事例数	74	1101	152	1023	164	1011	1175

上段：事例数 下段：%

図一3.1 O域3・2就寝室型平面の場合

図一3.2 O域1就寝室型平面の場合

図一3.3 O域0就寝室型平面の場合

図一3 O域内就寝室数別遊び位置の変化

し、ライフステージとともに減少する。

- ③ 余室使用も3平面類型の中で相対的に高い値を示し、ライフステージとともに増加する。

以上のことをまとめると、ライフステージとともにAB室使用が減少し、余室使用は増大する傾向があることと、O域内の就寝室が少なくなればなるほどおのこの傾向が顕著となり、自寝室使用は減少することがわかる。このことは、寝室位置がO域にあるかK域にあるかが、遊び位置とかわることを予想させる。

3.2 遊び位置と就寝形態

ここでは、自寝室がO域内にある場合とK域内にある場合で、遊び位置がどのように異なってくるかをみるととする。しかし、親と幼児が同室で就寝している場合とそうでない場合とでは遊び位置の自寝室化に差が生ずることが予想される。そこで、就寝形態により遊び位置がどのように異なるかをまず考察し、次にそれぞれの就寝形態で自寝室の位置による遊び位置の違いをみると

とする。なお、考察対象平面は狭小 AB 室型平面と行燈 AB 室型平面を除くが、本項ではさらに、位置の指標である余室を O 域にある余室（O 域余室と略記）と K 域にある余室（K 域余室と略記）とに分けるため、O 域にしか就寝室がない平面型と K 域にしか就寝室がない平面型を除いたものとする。

（１）就寝形態別遊び位置

図—4 は、親と長子が同室で就寝している場合（以下親子同室就寝型と略記）、長子が他の子供と同室で就寝している場合（以下子供複数就寝型と略記）、長子が 1 人で就寝している場合（以下長子 1 人就寝型と略記）とに分けて遊び位置をみたものである。

この 3 つの図を比較すると、親子同室就寝型の場合と他二者との間で異なる傾向のあることがわかる。すなわち、親子同室就寝型の場合の遊び位置は、他二者より自寝室使用が少なく、逆に AB 室使用や O 域余室使用・K 域余室使用が多く、ライフステージの各段階で比較してもおおむねこの関係がみられる。

このことは、遊び位置をみる場合、就寝形態も考察しながらみる必要のあることを教えてくれる。

（２）自寝室の位置別遊び位置

図—5、図—6 は、考察対象住み方事例を、親子同室就寝型の場合と、子供複数就寝型と長子 1 人就寝型とを合計した場合とに分け、それぞれ長子が O 域で就寝している場合（以下長子 O 域型と略記）と K 域に就寝している場合（以下長子 K 域型と略記）とで、遊び位置がどのように異なるかをみたものである。

＜親子同室就寝型＞の場合（図—5）、

- ① 就寝室が長子 O 域型、長子 K 域型にかかわらず、自寝室使用は少ない。
- ② 長子 O 域型、長子 K 域型に共通して、Cb～Ck1 の前半で AB 室使用が多い。
- ③ 長子 O 域型、長子 K 域型に共通して、Cb～Ck1 の後半では余室使用が多くなる。長子 O 域型では O 域余室使用と K 域余室使用とに分散し、長子 K 域型では O 域余室使用に集中する。

＜子供複数就寝型・長子 1 人就寝型＞の場合（図—6）、

- ① 親子同室就寝型と比較し自寝室使用が増大し、長子 K 域型より長子 O 域型で多い。
- ② 親子同室就寝型でみられた Cb～Ck1 の後半で多くなる長子 K 域型の O 域余室使用が、ここでも認められる。

以上のことをまとめると、就寝室が長子 O 域型、長子 K 域型にかかわらず、親子同室就寝型では自寝室使用が少い。自寝室が K 域にある場合、遊び位置は自寝室使用が少なくなり、O 域余室使用が多くなる。

4. 勉強位置と O・K 域

勉強位置にも、AB 室の規模や AB 室が直接外気に接

図—4.1 親子同室就寝室型の場合

図—4.2 長子 1 人就寝室型の場合

図—4.3 子供複数就寝室型の場合

図—4 就寝形態別遊び位置の変化

図—5.1 長子 O 域型の場合

図—5.2 長子 K 域型の場合

図—5 親子同室就寝室型における遊び位置の変化

図—6.1 長子 O 域型の場合

図—6.2 長子 K 域型の場合

図—6 長子 1 人・子供複数就寝室型における遊び位置の変化

するか否かが影響することが考えられる。そこで本項も、遊び位置と同様、狭小 AB 室型平面と行燈 AB 室型平面を考察対象住戸から除くこととする。また、3.1 と同様、余室のある住み方事例を考察対象とする。

4.1 勉強位置と O 域内就寝室数

図—7 は、3.1 と同様の方法で、勉強位置とライフス

テージとの関係をみたものである。各平面類型ごとに勉強位置をみると、

<0域3就寢室型平面>では(図-7.1),

① 自寢室使用はCiを除いてほぼ横ばいである。

② AB室使用はライフステージを通してみられない。

<0域2就寢室型平面>では(図-7.2),

① Ciでは余室使用と自寢室使用は同程度の割合で現れるが、ライフステージとともに余室使用は少なくなり、自寢室使用が増加する。

② AB室使用はライフステージを通して少ない。

<0域1就寢室型平面>では(図-7.3),

① Ciでは余室使用が自寢室使用を上まわることが、ライフステージとともに、余室使用は減少し、自寢室使用が増大する。

② AB室使用は、前二者の平面類型と比較し高い値を示すが、ライフステージとともに減少する。

<0域0就寢室型平面>では(図-7.4),

① ライフステージとともに、余室使用は減少し、自寢室使用が増大する。

② AB室使用は、Ciで4つの平面類型中一番高い値を示す。

以上のように、勉強位置はライフステージとともに変化し、ライフステージの最成長段階でようやく自寢室に収れんする。勉強の初期段階では0域内の就寢室が少なくなればなるほど、AB室使用および余室使用の割合は高く、逆に自寢室使用が少ない。

4.2 勉強位置と就寝形態

4.1の考察より、勉強位置も自寢室の位置とかかわりあいをもつことがうかがわれた。そこで、ここでも、遊び位置の分析同様、就寝形態および自寢室の位置と絡めて分析する。なお、考察対象平面は3.2と同様とする。

(1) 就寝形態別勉強位置

図-8は親子同室就寝型、子供複数就寝型、長子1人就寝型の各場合ごとに、勉強位置をみたものである。この3つの図を比較すると、遊び位置と同様、親子同室就寝型と他二者との間で異なる傾向をみせる。すなわち、親子同室就寝型の場合の勉強位置は、自寢室使用が他二者より極端に少なく、逆にAB室使用や0域余室・K域余室使用が多く、また一部の段階を除いてライフステージの各段階で比較しても、この傾向が読み取れる。

以上のことより、勉強位置を分析する場合も、就寝形態と絡めながら考察する必要のあることがわかる。

(2) 自寢室の位置別勉強位置

図-9、図-10は、遊び位置と同様、考察対象住み方事例を親子同室就寝型の場合と、子供複数就寝型と長子1人就寝型とを合計した場合とに分け、就寝室が長子0域型と長子K域型とで勉強位置がどのように異なるかをみたものである。

図-7.1 0域3就寢室型平面の場合

図-7.2 0域2就寢室型平面の場合

図-7.3 0域1就寢室型平面の場合

図-7.4 0域0就寢室型平面の場合

図-7 0域内就寢室数別勉強位置の変化

図-8.1 親子同室就寝型の場合

図-8.2 長子1人就寝型の場合

図-8.3 子供複数就寝型の場合

図-8 就寝形態別勉強位置の変化

<親子同室就寝型>の場合(図-9.1),

① 就寝室が長子0域型、長子K域型にかかわらず自寢室使用は少ない。

② 住み方事例のあるCi~Ck2で比較すると、長子0域型より長子K域型で、AB室使用、0域余室使用が多

図-9.1 長子O域型の場合

図-9.2 長子K域型の場合

図-9 親子同室就寝型における勉強位置の変化

図-10.1 長子O域型の場合

図-10.2 長子K域型の場合

図-10 長子1人・子供複数就寝型における勉強位置の変化

い。

<子供複数就寝型・長子1人就寝型>の場合(図-10.1),

① 親子同室就寝型と比較し、自寝室使用が長子O域型、長子K域型にかかわらず多い。

② Ci~Ck2で、長子O域型より長子K域型でAB室使用、O域余室使用が多い。

以上のことをまとめると、親子同室就寝型では、就寝室が長子O域型、長子K域型にかかわらず自寝室使用は少ない。就寝形態にかかわらず、自寝室がK域にある場合、勉強初期段階で勉強位置はAB室使用、O域余室使用が多くなる。

5. まとめ

以上のことをまとめると、

① 幼児の遊び位置、子供の勉強位置は、AB室の規模、AB室が直接外気に接するか否か、O域内の就寝室の数等に影響されることがうかがわれる。

② 親子同室就寝型では、幼児の遊び・子供の勉強とも、その位置は自寝室とされることが少ない。

③ 親子同室就寝型、子供複数就寝型、長子1人就寝型にかかわらず、自寝室がK域とされる場合は、遊びの位置、勉強の位置ともライフステージの初期段階から中間段階にかけてO域内のAB室か余室とされる傾向が認められる。

以上のごとく本報では、就寝分離・就寝分解の時期お

よび親と子供の寝室位置変化を分析することにより提案されたO・K域が、幼児の遊び位置や子供の勉強位置に対しても大きくかかわっていることを示した。

次報では、単純家族を対象とした「ライフステージによる住み方変化の研究」として、接客位置のライフステージによる変化を分析することにより、接客位置に関する住要求を考察する予定である。

注

- 1) 住戸規模と部屋数の関係については、ハウジング・スタディ・グループ 代表鈴木成文「日本と韓国の住居の近代化過程の比較考察—住様式の持続と変容—」(住宅建築研究所報 No. 13, 1986.)で、韓国では住戸面積が増大してもチムシル(寝室)の数はせいぜい3~4室どまりであり、日本と異なる傾向をみせることが報告されている。
- 2) 個室の分断化・閉鎖化については、鈴木成文「住文化の持続と変容—計画の立場からの日本住居現代史—」(住宅総合研究財団研究年報 No. 15, 1988.)の「14.文化の力と計画の役割」の中で、計画の目標像の1つとして、「子供の個室の閉鎖化・分断化に歯止めをかけ、家族統合を促す空間構成を探索すること」が挙げられている。
- 3) 就寝分離、就寝分解という言葉は、この両者を合わせて就寝分離あるいは就寝分解と、あるいは食寝関係の場合「分離」が、また寝室どうしの場合「分解」が使われている等混乱がある。本研究では、子供が親から独立して就寝することを就寝分離、また子供どうしが独立して就寝することを就寝分解と定義する。
- 4) 第1報とは、「集合住宅の住戸平面と就寝分離・分解の時期—ライフステージによる住み方変化の研究1—」(日本建築学会計画系論文報告集, No. 422, 1991.4.)を指す。
- 5) 第2報とは、「寝室の位置関係からみた住戸内ゾーン概念の提案—ライフステージによる住み方変化の研究2—」(日本建築学会計画系論文報告集, No. 428, 1991.10.)を指す。
- 6) いわゆるnLDK平面のnに相当する部分を就寝の場として使用しているか否かにかかわらず就寝室と、就寝室の内、実際に就寝の場として使用している部屋を寝室と呼ぶこととする。
- 7) オープン域(O域)とは、LDKと直接つながる就寝室およびLDK自体とからなる一連の空間を指し、隔離域(K域)とは、LDKとは廊下等で連結され、LDKと直接つながらない空間を指す。
- 8) 本研究では、家族型のCk4・Cmf(注12)を参照)の段階を言う。
- 9) 近年、公私室分離型平面という言葉も使われているが、ここでは原文(注10)に従い公私室型住宅という言葉を使う。
- 10) 扇田 信「公私室型住宅の分析—私室部分について—」日本建築学会論文報告集, 第63号, 1959.10.
- 11) 鈴木成文, 下山真司ほか3名「公的空間に関する研究(公団アパートにおける公私両空間の分化について—1)」日本建築学会論文報告集, 第69号, 1961.10.
- 12) Co, Cb, Ci...等で表されている家族型は、研究者によりその意味内容が異なる場合がみられる。本報では、Coを主婦が40才未満の場合とし、Co+を同40才以上とする。

また、一般の家族型の分類にはない Ck4 とは長子が 15～17 才の単純家族を指し、Cmf とは子供の数、性別にかかわらず長子が 18 才以上のものを言う。

- 13) 住み方事例とは、住み方変化（アンケートでは寝室の数、位置、家族人数いずれか 1 つでも変化することを住み方変化と定義）が起こった前後それぞれの住み方に、家族内での住み方変化の起こらなかった場合も家族型ごとに 1 つの住み方事例とみなし、これを加えたものである。
- 14) 就寝室内、寝室として使われていない部屋を言う。
- 15) 本報では、AB 室の合計面積が 20 m² 未満のものを狭小 AB 室型平面と、同 20 m² 以上のものを規模一般 AB 室型平面と定義する。また、A 室が直接外気に接する平面型を直外接 AB 室型平面と、A 室が直接外気に接しない平面を行燈 AB 室型平面と定義する。さらに、O 域内の就寝室の数で、O 域 1 就寝室型平面、O 域 2 就寝室型平面等と定義する。

本論文に関する既発表論文

- 1) 笠嶋 泰，今井正次，松本壮一郎：ライフサイクルからみた居室の使い分けに関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp. 1081～1082，1984. 10.
- 2) 笠嶋 泰，今井正次，松本壮一郎：公的空間の変転に関する研究—ライフサイクルからみた部屋構成—，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp. 35～36，1985. 10.
- 3) 笠嶋 泰，今井正次，松本壮一郎，前田幸則：ライフステージと公的行為位置—4 LDK 住戸における住戸内生活の変転に関する研究③—，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp. 223～224，1988. 10.
- 4) 笠嶋 泰，今井正次，松本壮一郎：親子寝室の位置関係に関するライフステージ上の変化—オープン域の提案—，日本建築学会近畿支部研究報告集 30 号，pp. 285～288，1990. 5.
- 5) 松本壮一郎，今井正次，笠嶋 泰：オープン域と非寝室系行為の展開，一育児行為を中心として—，日本建築学会近畿支部研究報告集 30 号，pp. 289～292，1990. 5.
- 6) 松本壮一郎，今井正次，笠嶋 泰：育児行為位置の変転からみた「オープン域」「隔離域」の意味，日本建築学会東海支部研究報告 29 号，pp. 433～436，1991. 2.
- 7) 笠嶋 泰，今井正次，松本壮一郎：集合住宅の住戸平面と就寝分離・分解の時期—ライフステージによる住み方変化の研究 1—，日本建築学会計画系論文報告集，No. 422，pp. 45～52，1991. 4.
- 8) 笠嶋 泰，今井正次，松本壮一郎：寝室の位置関係からみた住戸内ゾーン概念の提案—ライフステージによる住み方変化の研究 2—，日本建築学会計画系論文報告集，No. 428，pp. 137～145，1991. 10.

(1992 年 1 月 10 日原稿受理，1992 年 4 月 1 日採用決定)